

「教育臨床総合研究21 2022研究」

学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析

— 第九期（令和2年度・令和3年度）の評価票から —

Exploring the Third-Party Evaluation on the Education Practices of the Faculty of Education at Shimane University : Evaluation on the Practice of 2021 Fiscal Year

廣 兼 志 保* 佐々木 直 樹*

Shiho HIROKANE Naoki SASAKI

小早川 倫 美* 野 津 翔 平**

Tomomi KOBAYAKAWA Shohei NOTSU

要 旨

本学部の外部評価委員である学部教育活動評価委員に、2年任期の終了年度末に「外部評価票」による質問紙に答える形で外部評価をお願いしている。本稿では、第九期にあたる令和2年度～令和3年度の2年間の教育活動に対する評価結果を分析することで、今期の成果をまとめるとともに、次期に向けた課題の抽出を試みた。

〔キーワード〕 外部評価, FD

I 学部教育活動評価委員会の役割と活動

山陰両県の学校教員養成を担う学部として平成16年度に改組した島根大学教育学部では、その直後から外部評価に関する組織を設置し、教育改善に努めてきた。その経緯は既行の報告書(参考文献)に詳しい。

また、平成28年度からは、島根大学・島根県教育委員会・鳥取県教育委員会を構成機関とする「山陰教師教育コンソーシアム」が新たに設置され、外部評価もその活動の一環に組み込まれることとなった。同コンソーシアムは、構成機関の連携を推進・強化し、教員養成から教員研修までの教育・研修システムを構築し、地域や学校の現代的教育課題に対応でき、地域の教育力向上に資する教師を育成することを目的とするものである。そのために、島根大学教育学部と島根大学教職大学院における教育活動の評価も、中心的な事業の一つに位置づけられている(「山陰教師教育コンソーシアム規約」平成27年12月25日制定)。

島根大学教育学部の外部評価に関する組織である学部教育活動評価委員会は、その設置要項(「島根大学教育活動評価委員会設置要項」平成28年6月1日一部改正)のなかで、学部におけ

*教育学部附属FD戦略センター兼任教員(授業改善・外部評価部門)

**教育学部附属FD戦略センター

る教員養成教育の内容、方法、実績等の外部評価に関する業務を行うものとされ、委員は、(1) 教育行政、(2) 学校教育、(3) 社会教育・青少年教育・スポーツ、(4) 芸術文化・NPO、(5) 企業・報道関係・その他市民社会、の5分野から山陰両県の有識者(分野ごとに2名程度、任期は2年)を選出し、山陰教師教育コンソーシアム会長が委嘱するものとされている。

令和2年度～令和3年度は、平成16年の教育学部改組時から数えると、第九期目にあたる。委員は両年度ともに10名(交代により延べ14名)に委嘱し、任期中の活動実績は下記の通りである。

令和2年度

9月24日(木) 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において第1回の学部教育活動評価委員会を開催した。例年であれば、学部専門科目の授業、基礎体験セミナー、教育実習の様子などを評価委員に視察していただいているが、コロナウイルス感染防止対策の観点から、令和2年度は、学生と評価委員が直に対面する活動は控え、規模を縮小して委員会を開催することとなった。令和2年度は第九期の初年度にあたるため、学部教育の基本方針、学部の教育組織、FD戦略、学部カリキュラム、入試と就職の状況などについての学部教育の概況を説明した。また、未曾有のコロナ禍における大学教育の状況に対して社会的な関心が集まっていたことから、コロナウイルス感染拡大防止対策下における教育活動についての本学部の対策についても説明を行った。その後、本学部の教育活動について質疑・協議を行った。出席委員は10名であった。

12月2日(水) 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において第2回の学部教育活動評価委員会を開催した。前述のように令和2年度は学生と評価委員が直に対面することができなかった。そこで、視察に替わる内容として、学生の学修活動の様子をお伝えするため、1年生を対象とした学校教育実習Ⅰの様子及び学校教育実践研究Ⅱにおける授業協議と上級生によるピアサポートの様子を、動画を交えて紹介した。また、学部教育概況報告として、コロナウイルスの感染状況に対応した後期の授業実践の様子や入試・就職の状況を説明した。その後、本学部の教育活動について質疑・協議を行った。出席委員は9名であった。



学校教育実習の説明

令和 3 年度

10月13日（水） 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において第1回の学部教育活動評価委員会を開催した。コロナウイルス感染防止対策のため、令和3年度も評価委員に学生の学修活動の様子を視察していただくことができなかった。そこで、学部教育概況説明において、学生が体験学修を行っている様子やオンラインによるグループディスカッションの様子などの動画を交えて、基礎体験学修や教職実践演習の取り組みについて紹介した。また、令和3年度より新たに設置された山陰教員研究センターの概要、入試や就職の状況などについても報告した。その後、本学部の教育活動について質疑・協議を行った。出席委員は6名であった。



学部教育概況説明，質疑・協議

12月8日（水） 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において第2回の学部教育活動評価委員会を開催した。会の前半では、学部4年生と評価委員との少人数グループでの学生懇談会を実施し、本学部での4年間の取り組みや卒業後の抱負などについて自由に懇談していただいた。会の後半では、学部教育現況説明として、本学部の教育実習カリキュラムについて説明した後、3年生の学校教育実習Ⅳにおける実習生の授業の様子や生徒指導等の様子を動画も交えて紹介した。また、今年度からの新たな取り組みである教職大学院一貫教育プログラムについて説明し、就職状況についても報告した。その後、本学部の教育活動について質疑・協議を行った。出席委員は7名であった。



学部4年生との懇談会

2年任期の終了年度には、質問に回答する形で記入していただく「外部評価票」によって、各評価委員の外部評価が行なわれる。その評価票の分析とまとめを行って、次期のFD戦略を企図することが学部FD活動の基軸となっている。そこで本論では、第九期（令和2年度・令和3年度）における本評価票の分析を行い、今期の成果と次期に向けた課題を提示することを主旨とする。

評価票には毎期共通の質問項目が使用されている。例年であれば、3年生対象の面接道場が実施されるのに伴って、キャリア教育の一環としての面接道場の必要性についての意見も伺うが、今期には面接道場が実施されなかったため、面接道場に関する質問項目は削除された。

次章以降、質問紙の様式に沿って外部評価票の記述内容に関する考察を行い、全体的なまとめを行う。

II 島根大学教育学部・学部教育活動評価委員会による外部評価結果（令和2年度・令和3年度）

【項目Ⅰ：本学部の地域社会における存在意義、貢献度について】

設問Ⅰ－1 「教員養成特化型学部」である本学部の「存在意義」あるいは「貢献度」について、みなさま、あるいはみなさまの周囲では、どのように認知されているとお考えでしょうか。率直なご意見をお聞かせください。

【結果と考察】

この質問項目は、本学部の「①存在意義」と「②貢献度」について、委員やその周囲における「③認知度」をうかがったものである。以下にその回答結果と考察を示す。

「存在意義」「貢献度」

本学部の「存在意義」及び「貢献度」に関しては、以下のような回答をいただいた。

「島根・鳥取における唯一の教員養成特化型学部として、これからの教育現場（特に地元）に必要な人材を育成していく、地元にとってなくてはならない存在だと思います」「山陰地域における教員養成の中心的役割を持ち、他に代わりのない存在だと認識しています」「山陰地域における教員養成の中心的な役割を担っており、高く評価している」「鳥取県の教育現場でも、島根大学を卒業した教員は、各学校でミドルリーダーとして学校を引っ張る大きな存在になっています。これは、1000時間体験学修の大きな成果だと感じています」といった山陰地域の教員養成を担う中心的な役割に存在意義や貢献度を認める回答が多かった。

また、「将来の教育を担う人材を育成する教員養成型の教育学部の存在は、昔も今も大変大きいものだと考えます」というように、時代を超えた不変の存在意義を指摘する回答がある一方、「現在の学生は出身県が様々だと思います。ですので存在意義や貢献度も昔とは変化しているように感じます。現在そして未来の状況にマッチした意義等をこれからも考えていく事になると思います」「歴史的にも多くの教育に携わる優れた方を輩出していらっしゃいますが、昨今の貴学部の人間力のある教師を育てるという目的の下、様々な取り組みが行われていることに地域の人間としてとても嬉しく思っています」「SDGsなどを基軸とした、学校現場との協業も多く見受けられるようになっており、拡充されてきている感が強い」という回答もあつ

た。社会状況の変化に伴う新たな教育課題を捉え、学校現場と連携して課題解決に取り組む姿勢が評価されているといえる。

「認知度」

本学部の「存在意義」「貢献度」についての「認知度」については、さほど高くないようであった。

「管理職になるまで、島根大学教育学部の細かなこと（定員、教育実習の時期、1000時間体験学習）を知りませんでした」「今回、外部評価委員会に参加させていただくまでは、島大教育学部の1000時間体験学修、地域に対する取り組み、山陰地区の教育力向上への取り組み等について詳しくは知らなかった。私の周囲では詳しく知っているという方は少ないと思う」「地域に広くその取り組みが伝わっているかという点と残念ながら大学周辺、または関わった団体、個人を中心ではないかと感じています」「若い教員については島根大学教育学部卒の方が増えています。しかし、鳥取県内の中学校教員は、島根大学教育学部についてあまり知らないようです」といった回答から、本学部の活動に関わる方以外には地域に対する取組や山陰地区の教育力向上への取り組み等についてあまり認知されていない様子がわかる。

「『教員になるなら、島大』のイメージは現在も残っており、周囲の方々もよく口にされている」「40代半ば以降の方にはいまだに0 免課程のイメージを残している様子があり、高等学校での進路指導にも少なからず負の影響を及ぼしているのではないかと危惧することもある」といった回答からは、地域の教員養成の役割を担ってきた歴史とともに、本学部の過去のイメージが根強く残っている様子がわかる。

認知度の低さについては外部評価票の分析を開始した第五期（平成24・25年度）以降繰り返し指摘されており、学部としても広報の工夫や改善を積み重ねているところである。今後とも学部の地域貢献に関する最新の情報を発信し続けていく必要があるといえる。

設問 I - 2 地域社会に対し、本学部の存在意義や貢献度を高めていくために、今後、どのような努力、工夫、方策、企画を行っていくべきでしょうか。みなさまの視点から、自由なご意見をお聞かせ下さい。

【結果と考察】

回答には、地域社会や学校現場との連携に関する意見が多くあげられた。また、学部の存在意義に関する情報発信の必要性についても指摘していただいた。

地域社会や学校現場との連携について

地域社会や学校現場との連携については、様々な提案をいただいた。具体的には、「(1) 公開講座（現職教員対象のリーダー養成以外に、特別支援教育複式教育の勉強会や小中学生を対象としたものづくり講座など）、(2) 高大連携事業（現在益田高・浜田高の教師塾等を拡充される）、(3) その他の小中学生対象の事業（JSTジュニアドクター育成塾など）といった、研修の形態だけでなく学校教育支援や社会教育支援、リカレント教育開発によって、教育学部のリソースを山陰の教育の支援活性化に寄与する活動があると良い」「学童クラブ支援や子どもの体験活動補助、地域の取組に関わるなど、地道な取組を重ねていくことだと思います」と

いった具体的な連携の場の提案や、「地域行事などへの企画段階からの参画が必要と感じます。また、地域の方と直接関わり、一緒に楽しむことが、地域に根差し、地域の方に喜ばれ、それが結果的に大きなPRにもつながると考えます」といった関わり方の提案をいただいた。いただいた提案を今後の取組の参考にしたい。

また、「教員志望の学生を多く入学させるためのシステムがあるとよい（例：高校との連携）地域社会や学校現場との連携や交流があると知ってもらう機会となる」「島根県も慢性的な社会教育主事不足となっている。貴学部の特長も考えると『学校や社会教育施設を巻き込んだ合同事業』開催などを企画し、社会教育士資格取得の必要性をアピールしていくことも今後重要ではないかと考える。社会教育主事講習の地域教育魅力化コーディネーター育成コースは興味深い取り組みであると感じている」といった入学者の獲得にもつながるような提案もいただいた。

学部の存在意義に関する情報発信の必要性について

学部の存在意義に関する情報発信の必要性については、「様々な地域に教員として赴任していく学生のためにも、地域の住民、NPO、企業、公民館や地域おこし協力隊の方々などとの繋がりをつくって、地域を知り、人を知るということを通じて貴学部の存在を広く深く知ってもらうことができないでしょうか。都会地と違い、学生がこれから社会人となり出ていく先は地域的に濃い場所が多く、それぞれ課題が山積みだと思います。教育という視点で地域課題を解決することも可能だと思いますので、学生のころから、もっと地域に関わってもらいたいと思います。地域も期待していると思います」「学生たちが1000時間体験などを通して、存在意義が伝わっている部分は多大にあると思いますが、その素晴らしい点と点を結ぶ取り組みが必要かと思います」「学生さんや卒業生教員たちによる情報発信など、身近な口コミ拡大が必要である」といった提案からは、人と人との協同による直接的な体験を通じた情報発信の重要性がうかがえる。

また、「大学の間に教師力を高める体験学修とともに、社会人として様々な場で人とのよりよい付き合いがたがえるような準備をする幅広い体験もあるとよいかもしれません」という意見からは、体験学修を通して一社会人としてのコミュニケーション力を育成することも求められていることがわかった。

【項目Ⅱ：1000時間体験学修（基礎体験学修）について】

学生の「教師力」を培う方策として、本学部では「1000時間体験学修」を導入しています。ここでの設問は、その約半数の時間を占めている、学童保育・社会教育・地域イベント・ボランティア活動・学校での学習支援といった教育活動や地域活動への参加についてお伺いします。

設問Ⅱ-1 学生の活動は、受け入れ先から好意的に受け止められているとお考えでしょうか。

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. とてもそう思う | 2. ややそう思う |
| 3. 一概には言えない | 4. あまりそう思わない |
| 5. まったくそう思わない | |

【結果】集計結果（下図 1 参照）

9名の委員中、6名が「とてもそう思う」2名が「ややそう思う」と、肯定的に回答している。

設問Ⅱ-2 このような体験学修を伴う学生教育は、教員養成教育に必要な取り組みだ
とお考えでしょうか。

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. とてもそう思う | 2. ややそう思う |
| 3. 一概には言えない | 4. あまりそう思わない |
| 5. まったくそう思わない | |

【結果】集計結果（下図 1 参照）

9名の委員中、6名が「とてもそう思う」3名が「ややそう思う」と、肯定的に回答している。

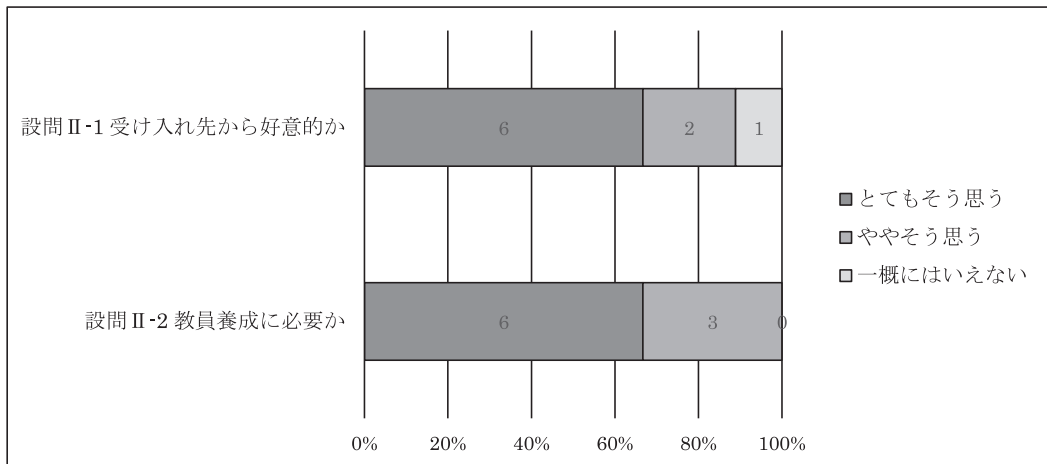


図 1 設問Ⅱ-1, Ⅱ-2 の集計結果

設問Ⅱ-3 このような体験学修をより有意義に深化させるためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【結果と考察】

設問Ⅱ-1, 設問Ⅱ-2 からわかるように、基礎体験学修については、肯定的に評価していただいております。第四期以降の分析結果と同様の結果となった²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。設問Ⅱ-3からは、体験学修をより有意義に深化させるための方策について以下のようなご提案をいただいた。

多様な体験の保障

基礎体験学修の内容や体験先について、幅広い活動ができるようにしてほしいという意見が多かった。具体的には、「幅広い活動ができるよう、関係機関や団体等から多様な活動をあつめる必要があり、と同時に、学生には積極的に体験したことの無い分野に参加を奨励すること

が大切だと考えます。(教員志望者だからこそ、社会教育・福祉や学校外の活動が教職に就いたとき、背景をさまざまな視点で捉えることができる)「学校関係の体験を少なくしてでも、社会教育団体・青少年社会教育施設・民間業者などの体験学習の場を多く経験できると、より広い視野で物事を捉え、考えも広がると感じます。また、それがより人間力を高め、教員としての資質向上にもつながると感じます」という提案は、体験活動を通して社会の様々な実像を知ることが、将来教職に就いたときに必要となる子ども理解のための多角的な視点や幅広い視野を得ることにつながる、という指摘だと考える。後述する学生の主体性とも関連するが、「大学で準備するだけでなく、自身で考え動く主体性を尊重するため、災害ボランティアなど日本、海外含めた体験についても認められると、個性的な体験を持つ先生が増えるのではないかと期待しています。立派でなくてもいいので、広い世界を持つ先生を望みます」という意見もあった。

また、学校での体験活動に対しては、「学校での活動に学生が参加する場合には、可能ならば学習支援のみならず学級経営について学ぶ場もあるとよい」「以前は、米子市として体験学習の学生を学校で受け入れるにあたって、市教委から、できるだけ学校の業務に関わらせて欲しいと指示があり、募集要項を作成し、対応してきました。最近では、市教委からの指示がなく、学校任せになっています。学校現場で体験を行う際の視点を大学から学校に示されてもよいと思います」という意見もあった。体験学修を通して学級を運営する力や実務能力を育成することが期待されていると思われる。

体験の場や内容を広げ多様な体験を保障することは、従来から要望されている。基礎体験学修を通して教師に必要な多角的な視点や幅広い視野を獲得することが、継続的に期待されていることが伺える。

守られた活動としての体験学修に対する意見

一方で、「ある程度、学修先がお膳だてされている状態であり、かなり守られつつの活動も多いですので、やらされている感が強くなっていませんか、この点は心配です」「地域の方からは『大切だけど、社会人として稼いで生きていくというリアル感からは程遠い。アルバイトでお客さんたちからのクレームなど聞いたほうが、教員になっても生きるのでは…』といったようなことも聞いたことがあります」といった意見もあった。これらの意見は、学生の主体的な取り組み姿勢への期待や、社会人として生きる現実感を体験してほしいという願いを反映したものであると思われる。

学生自身の振り返りの重要性

「体験後の自己の振り返りが重要だと感じる」「体験を振り返り、今後の学びとのつながりや、次の体験に目的をもって参加し、学生自身の課題に迫るための省察の伴走が必要。18年間の実践のもと、いかに、質を高くするかだと考えます」個々の学生の体験後の振り返りは、事後指導の場や必修の基礎体験セミナーで実践されているだけでなく、学修ポートフォリオにも学生自身の振り返りが入力され、指導教員とも一年間の振り返りを共有できるようになっている。第九期は基礎体験セミナーなどの様子を直に視察していただく機会や学修ポートフォリオについて紹介する機会がなかったが、学生の振り返りの様子やそれをサポートする教員の様子、そして学生の振り返りによる学びが学部教育活動にどのように組み込まれているかについても、

何らかの形でお伝えする必要があるようである。

卒業後の情報の収集と分析の必要性

「1000時間体験学修を受けて教員になった生徒の卒業後の情報を収集し分析を行うと良いと思った。数年後に他の大学を卒業した生徒との比較を行うことで1000時間体験学修の成果がより見えやすいものとなると思う。また、1000時間体験学修の内容は多岐にわたっている印象を受けたので、1000時間体験学修の内容による違いもわかると思う」という意見をいただいた。卒業生の追跡調査は従来から実施されており、第4期中期目標期間の構想にも掲げられている取り組みである。調査の結果から得られた本学部の卒業生の強みや課題を明らかにし、教育カリキュラムの改訂や指導方法の改善、さらには、学部の広報に活かしていくことが課題であると思われる。

【項目Ⅲ：学生の育ちについて】

本学部では「教師力」を3つの分野からとらえるとともに、それぞれを次のように意味づけています。

- ①教育実践力：学習者を理解し、身につけた知識や技能で教育を実践する力
- ②対人関係力：相手や目的に応じて適切なコミュニケーションを行う力
- ③自己深化力：必要な情報をさまざまな方法で探したり発信したりして、自己の知識や能力を深める力

設問Ⅱ 本日の学生懇談会あるいは学校教育実習・基礎体験セミナー・教職実践演習等における学生の様子をご覧になられ、学生の育ちに関する印象を、上に示した3つの分野を参考にされながらお聞かせください。

【結果と考察】

第九期は動画を通して学生の活動やディスカッションの様子を視聴していただいたが、直に委員と学生が接することのできる機会は第2回委員会の学生懇談会のみであった。基礎体験活動の受け入れ先である社会教育関係の委員からの回答には、日頃の学生の様子に基づく評価もあった。

①教育実践力について

①教育実践力については、失敗の経験に関する回答が複数あった。「教育の場では、うまくいかないことも多いです。失敗することもあります。そういうことにくじけず頑張り続ける力や周りの人と力を合わせてやり遂げる力が重要です」「実践には多くの失敗があってその経験が学びのチャンスになるが、それを糧にする前に挫折し復元する経験がないままになっていることも課題に感じた。挑戦のスケールが小さいので、失敗しない、大学の時にする経験しておくことが望まれる」といった意見である。失敗から立ち直る経験の大切さを指摘していただいているといえる。

「2名の学生と懇談させていただき、『教員になる』という夢に向けて、一生懸命努力している様子が伺え、好感がもてた。特に、コロナ禍においても1000時間体験ができにくいなか、様々な意見を自分の学びとしていることとお話するなかで感じた。大学側が意図されている

力が、様々な教育活動を通じて、教員としてのふさわしい資質・能力につながっているように感じる」「本日の学生懇談会に参加された学生は、基礎体験活動の積み重ねにより、実践力やコミュニケーションを行う力をつけてきたと感じました」といった意見は、4年間の様々な教育活動の積み重ねを通じて教員に必要な資質・能力が育まれていることを肯定的に評価していただいているといえる。

一方で、「教員になってからが本当の勝負ではないでしょうか。日々の取り組みによって対応するしか方法はないと思われます。子どもたちのわずかな変化を見逃さない眼力(?)はトレーニングである程度は高まると思いますが」という意見もあった。教育実践力は教職に就いた後の日々の取り組みによって身につく、というご指摘であるといえる。

②対人関係力について

②対人関係力については、「中学校現場で、若い先生に必要なことは、生徒の気持ちを理解しながら、生徒と同じ目線に立って話をすることだと思っています。『②対人関係力』の育成が最も必要だと思います」「教員現場で教師として勤めるためには、教育に関する知識も必要ですが、子どもや保護者、地域そして同僚と人間関係を作ることが重要になります。知識や技能があっても、子供とうまく向き合えないと実践に結びつけられません。保護者と上手にコミュニケーションが図れないと、学級運営がうまく運びません、ですので、子どもだけでなく、様々な年代の様々な立場の人とコミュニケーションを図れる機会が大事かと思います」というように、対人関係力の育成の重要性、特に様々な年代の様々な立場の人とコミュニケーションできることの重要性をご指摘いただいた。

学生懇談会での4年生の様子からは以下のような意見をいただいた。「自分の言葉で自分の考え・意見を話されていました。これは、4年間の学んだ専門的知識と体験から身についた体得した力だと感じました。また、人の話を落ちついて聞く姿勢、共感する姿も見られ、温かい雰囲気の中で懇談会をすることができました。」という肯定的な評価であった。一方で、「オンライン授業のプラットフォームで学びの保証される一方で、上記②対人関係力・③自己深化力については、課題があると感じる。大学生からのヒアリング(学生懇談会)では、『コロナ禍になり専攻によっては研究室でのつながりがなくなった。』(入室の人数制限などによる)『絶対的に人と出会う機会・対話量が減っている』『サークルでも人と協議することや調整する体験が大きく不足している』といった声があった。②対人関係力が育める状況にないことがわかる」と、コロナ禍による負の影響をご指摘いただいた。

日頃の基礎体験活動の様子からは「これは不足しています。子どもたちに対しては、さすが教育学部、優しく・丁寧・ほぼ的確に接します。しかし、相手が同年代以上となると、相手が誰でも話し方が変わらない、今発してもよい言葉かどうかの判断、相手がどう思うかになかなか思いが及んでいない気がします。これが学校に勤めだしてからの同僚や保護者との関係性に大きく影響するのではないかと感じています。SNSは得意でも、電話が苦手ともいわれている世代ですので、対面型・電話型での意思疎通の大切さは今後も意識して育てていく必要があると思います」との評価をいただいた。相手に応じた話し方や、相手の気持ちを汲み取り、場をわきまえて言葉を選ぶことなど、対面型・電話型のコミュニケーション力の育成が課題であることがわかった。

③自己深化力について

③自己深化力については、学生懇談会での学生については「自身の学校に行きにくかった体験と大学で出会った学びを結び付けて考える学生、出会った先生から受けた体育の授業手法（体育でコミュニケーション力を高める）に注目している学生など、自分の体験を生かし実践しようとしている姿勢に感銘を受けました」という肯定的な評価をいただいた。一方で、「他者との対話などによって深められる③もコロナ禍にあって育成の難しさがある。また学生本人が不安を感じていることがわかった」という回答もあり、他者との関わりを通して自己を深化させていく機会が得られにくい現状を改めて認識させられた。

学生ができていることと課題については、「情報を探すことはネットに関しては優れている。発信もSNS等で端的に表現することは上手です。しかし、様々な情報源に当たろうとはせず、一部範囲の情報で分析を進めてしまい、『解のない時代』にやはり『解』を示そうとしている。『クリティカルシンキング』や『疑ってみること』の大切さをどうにか伝えていきたいものです」という評価をいただいた。

【項目Ⅳ：教員志望状況や入学希望者動向について】

<教員志望状況について>

設問Ⅳ－１ 令和２年度及び令和３年度の教員採用試験受験率について、率直な感想をお知らせください。

令和２年度：卒業生128名うち教員採用試験を受験した者81名 受験率63.2%

令和３年度：卒業予定者

122名うち教員採用試験を受験した者66名 受験率54.1%

- | | |
|---------------|------------|
| 1. かなり多いと思った | 2. 多いと思った |
| 3. どちらともいえない | 4. 少ないと思った |
| 5. かなり少ないと思った | |

設問Ⅳ－２ 令和２年度及び令和３年度の教職就職率について、率直な感想をお知らせください。

令和２年度：教師の道へ進んだ者73名（非常勤講師/保育士を含む）

教員就職率57.0%

令和３年度：教師の道へ進んだ者65名（非常勤講師/保育士を含む）

教員就職率53.2%

- | | |
|---------------|------------|
| 1. かなり多いと思った | 2. 多いと思った |
| 3. どちらともいえない | 4. 少ないと思った |
| 5. かなり少ないと思った | |

【結果】集計結果（下図３参照）

設問Ⅳ－１、Ⅳ－２とも、９名の回答のうち、６名が「少ないと思った」と回答し、２名が「どちらともいえない」、１名が「多いと思った」という回答であり、同数であった。教員就職

率と教員採用試験受験率のいずれについても、6割以上の方が「少ない」と思われたことがわかった。第六期までは「多い」と思った回答者が多かったが²⁾³⁾⁴⁾、第七期以降「多い」という印象から「少ない」という印象に転じ⁵⁾⁶⁾、第九期の今期も同様な傾向を継続していることがわかった。

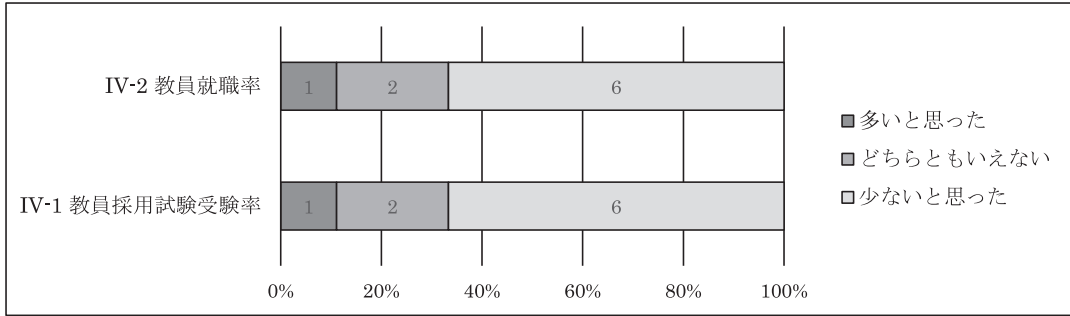


図3 設問V-1, V-2の集計結果

<入学希望者動向について>

設問IV-3 本学部への入学志願者を増やすためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【提案】

いただいた提案は、「入学試験の工夫」「教員採用試験対策の工夫」「小・中・高校生への働きかけ」「地域への働きかけ」「教職のイメージアップ」の5つのカテゴリーに大別できた。

「入学試験の工夫」には、以下のような提案があった。

▽鳥取県や鳥根県出身の教員を確保するというために、教育学部の定員の中に、鳥取県出身枠、鳥根県出身枠を設けることは可能でしょうか。

▽鳥根、鳥取県内推薦枠の拡充が必要かもしれません。

「教員採用試験対策の工夫」

▽教員採用試験受験者が少ない原因分析からその方策が導きだされると思います。

▽夢と希望を持つだけでは教師にはなれません。全国的に競争倍率は下がっていますが、試験そのものが簡単になってはいないはず。いわゆる知識量なども含めた対策の必要性や教師の働き方の現実等については、早くから学生に浸透させる必要性もあると思います。

▽鳥根県の野津教育長の答弁「自分の言葉化」に対応する対策も必要であると考えます。【設問Ⅲ③自己深化力関連】

「小・中・高校生への働きかけ」には、以下のような提案があった。

▽未来の仕事に関心を持ち始める小中学生あたりから選択の一つとして提案できるような方法があればと思います。小中学校での職業紹介で大学作成の動画を見てもらう、大学の先生から授業が受けられたり、子どもの先生体験、NHKラジオの子ども科学相談室のようなことなど、先生方の専門を地域の子どもたちに伝えていくのはいかがでしょうか。

▽中・高等学校との連携も必要だと思う。

▽①高校生の教育学部志望を増やすこと、②高校生が教育学部で成長している大学生の姿を見たり、話を聞く機会（オンラインを利用した対話の機会を複数回設ける、対象は高校1，2年）があるとよい。学年の早い段階で島根大学教育学部が認知されていることが大切。

▽積極的に高校等へ出向いたり、ネット等を使ったりして、今以上にPRをしていくことが必要だと思います。

「地域への働きかけ」には、以下のような提案があった。

▽特色ある1000時間体験学修は、本当に素晴らしいものだと思います、1000時間体験学修の狙い、取り組み、実践を発信、アピールし、多くの方に知ってもらうことが大切だと考えます。

▽県外からの学生も含め、山陰への定住ということも含め、定住財団などと関わり提案をしてはいかがでしょうか。山村留学、島留学等、特色のある学校づくりを全国的にもPRがされていますので、山陰での教育について関心を持つ志願者はいるのではないのでしょうか。

「教職のイメージアップ」には、以下のような提案があった。

▽多種多様な職業がある中で「先生になりたい」と思うには、教員という職業のやりがいを超える「きつい」というイメージが強すぎると思います。学校や先生にかかっている役目や責任が多すぎますし、先生というものは偉くて立派でなくてはというイメージも重圧があるのではないかと思います。大学だけではなく教育、社会全体が変わっていくべきだと思っています。それが子どもたちの「学校に行きたい」に繋がると思いますので、他の職業では認められている権利を教員があたりまえに行使できるようにするべきだと思います。山陰の教員輩出の実績を持つ大学、学部から国や両県の教育委員会へ教員の働き方についての改革を求められませんか。

▽教育学部に来ている生徒は、入学当時から教員になりたいという意識が強い傾向にあると感じたので、「教員の魅力」を高めることが教育学部の志願者増加に繋がると思う。「教員の魅力」については「やりがい」を上手く発信し、「報酬」「待遇」をよくすることだと思う。

▽新入生の初期オリエンテーションなど機会をみつけて、教職課程に関する説明会や現職教員による講話等、教職の魅力ややりがいをアピールする機会を増やす。

具体的な内容を含んだ提案が多々あり、貴重な示唆をいただくことができた。

【項目V：その他、学部に対するご意見やご要望など】

これまでにご回答いただきましたI～IV以外の事項につきまして、学部にご期待することも含め、ご意見やご感想がありましたら以下に自由にご記入ください。

【ご意見（自由記述）】

いただいた意見や要望は、「1000時間体験学修について」「教員に求められる資質の育成」「イメージアップと広報」「委員会のあり方に対する要望」の4つのカテゴリーに大別できた。本学部への期待に加えて、本委員会の運営や内容への要望もいただいた。

「1000時間体験学修に対して」には、以下のような意見があった。

▽島根大学で実践されている1000時間体験は、大学生も社会の一員であると早くから実感でき、豊かな経験ができる素晴らしいプログラムだと思います。1000時間体験のように、学生、大学

の先生という素晴らしい人材を持つ大学が地域に開かれ活躍されることを願っております。

▽学生には、1000時間体験学修を通して、多くのことにチャレンジして、失敗から学び、体験から学んでほしいと感じています。また、自らも体験活動を楽しんでほしいとも感じています。

▽全体を通じて1000時間体験学修を経験している生徒は非常によい経験をしていると思う。企業目線にはなるが、1000時間体験学修を経験している生徒が企業に入った場合、企業に入ってからなかなか経験できないことを経験しているため、入社してから仕事をするとときに大きな強みになっている気がする。同じように考えると、教員になってから経験できないことを経験することで教員になってから大きな強みにすることができるのではないかと感じた。

▽1000時間体験学修や社会教育主事講習について、余計な心配かもしれませんが、これらに参加することで学びは多いはずですが、逆に教員以外の分野への興味が広がり、結果教員採用試験を受験しないというような例もあるのではないかと、感じました。教員を目指すという軸が確固としたものではなかったということに気づいたことは良かったのですが。

「教員に求められる資質の育成」には、以下のような意見があった。

▽今まで以上に新卒者が即戦力として教壇に立つことになる。コロナ禍での養成、低倍率で採用、今後も多くの若手教員が現場に入ると考えられる。力がなくて教壇に立つことだけは避けたい。素直で真面目は必要だが、それだけでは今の教職は難しい。初任であっても先を見通し、業務に軽重をつけて複数の処理を行い、アジャイル思考で実践を積み重ねることや、わからないことは訊く、嫌がられても訊く、といった所作を身につけて社会に出ないと残念ながら現場によっては、丁寧に教えてもらえる環境にない可能性がある。採用試験対策も必要だが、教員に求められる力が高度化していることを養成段階に少しでも入れられるかが課題と考える。

▽今のコロナ禍、学生、大学側それぞれ大変なご苦労をしておられます。逆にこのような時だからこそオンライン化が強くなったり、人と接することの大切さを思い知ったりと、プラスの要素をもった学生が増えればと思います。

▽コロナもあり人々の心が危機にさらされていると思います。そんな中で心を育てる教育に期待をしたいと思います。自身のメンタルヘルスについて、そして他者の心や生きづらい人たちの存在も大切に考えられる先生が増え、その結果、豊かな心や体験を持つ子どもたちが育っていくことを願っています。また、行政がその環境を整えることを切に願います。未来の教員を養成し、教員になった後のサポートまで実施している大学・学部として、遠慮なく行政に改革を問いかけていかれてもいいのではないのでしょうか。

「イメージアップと広報」には、以下のような意見があった。

▽現在の教員志望者が決して多くない現状、とてもさびしく感じます。一般的に教員という仕事自体があまり良くないイメージを持たれてしまっているのかもしれませんが。このあたりを払拭していく事が大事なのかもしれません。

▽島根大学教育学部の進化に驚き、特に毎回、学生、教育について学部の先生方の熱いお気持ち伝わってくる委員会でした。

▽周囲の大人が島根大学の取り組みやその優れた教員養成の具体策を理解することが、キーポイントであるとの思いを改めて感じました。

「委員会のあり方に対する要望」には、以下のような要望があった。

▽教育活動評価委員会ですが、他の取り組みを知らず失礼いたしますが、教育関係者のみなさまと他のジャンルは分けてもいいのではないかと思います（手間が増えて大変かもしれませんが、同じことをしなくてもいいと思いますので）民間企業、NPO、文化、スポーツ、町おこしなどの方と大学・学部との意見交換会などもあるといいのではないかと思います。

▽コロナのこともあり生徒の生の声を聴けたのが一度きりだったのは残念だった。今回の懇談会では教員になった生徒（1名は公務員）の話だけを聞いたので、教員になっていない生徒の話も聞いてみたかった。

Ⅲ まとめ

Ⅱ章で得られた結果を項目ごとに整理し、学部として取り組むべき課題を以下にまとめる。

項目Ⅰの「存在意義」「貢献度」については、山陰地域を中心とした教員養成という役割を引き続き担いながら、社会状況の変化に伴う新たな教育課題を捉え、学校現場と連携して課題解決に取り組むことが求められる。認知度を高める努力については、今後とも広報の工夫や改善を積み重ねながら、学部の最新の情報を発信し続けていくことが課題であるといえる。

項目Ⅱの「1000時間体験学修」については、様々な活動の場を広げ、教師に必要な多角的な視点や幅広い視野を学生に獲得させることや、学生の主体的な取り組み姿勢を促し、社会人として生きる現実感を体験させることが課題であるといえる。体験活動後の振り返りの重要性についても指摘があった。また、卒業生追跡調査を通して本学部の卒業生の強みなどについて明らかにしていくことも課題であるといえる。

項目Ⅲの「学生の育ち」に対する評価については、失敗から立ち直る経験を積むことを通して学生に教育実践力を身に付けさせていくことが課題であり、コロナ禍にあって他者と関わる機会が少ない中でも、様々な年代の様々な立場の人との、対面や肉声によるコミュニケーションの力を身に付けさせることが重要性であるとの指摘があった。

項目Ⅳの「就職希望状況や入学希望者動向」については、本学部への入学志願者を増やすための様々な提案をいただいた。また、教員という職業の魅力ややりがいを早い段階から発信することの必要性や、教員の働き方や待遇の改善に向けて対外的に働きかけていくことについても指摘をいただいた。地域と協同しながら、本学部の教育や魅力についてより積極的にアピールしていくことが課題であるといえる。

項目Ⅴの「学部に対する意見や要望」については、1000時間体験学修に対して高評価をいただく一方で、教員に求められる力が高度化し、今まで以上に新卒者が即戦力として教壇に立つことになる現状において、養成段階で育成すべき資質や態度を具体的に提示していただいた。また、コロナ禍だからこそ身に付けられる技能や心の育ちも示していただいた。いずれも現状を見据えたうえで必要となる教育内容を示唆する重要な指摘である。学部教育活動評価委員会のあり方については、学生の体験活動や授業の様子を直に視察していただく機会を設定できなかった点に関して、それを補う機会をどのように設定するかを考える必要があり、次年度以降の喫緊の課題であるといえる。

以上、すべての項目にわたって示された評価・意見を考察し、今後本学部が取り組むべき課題が明らかにされた。貴重なご意見・ご提言をいただいた、学部教育活動評価委員各位に対し、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 教員養成GP報告書『戦略的FDによる資質向上スパイラルの実現』（平成19年3月 島根大学教育学部）
- 2) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第四期（平成22年・23年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.11』 御園真史・百合田真樹人・原丈貴・田邊美沙・河添達也（平成24年7月）pp.135-148.
- 3) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第五期（平成24年・25年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.13』 原広治・塚田真也・畑智子・河添達也（平成26年7月）pp.33-46.
- 4) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第六期（平成26年・27年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.15』 原広治・畑智子・河添達也（平成28年8月）pp.63-75.
- 5) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第七期（平成28年・29年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.17』 長谷川博史・佐々木直樹・畑智子・近藤翔平（平成30年9月）pp.17-31.
- 6) 「学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第八期（平成30年・令和元年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.19』 佐々木直樹・廣兼志保・野津翔平（令和2年10月）pp.38-48.